

生駒山の西麓には四条畷市に始まり、北から南へと大東、東大阪、八尾、柏原の各市が並んでいる。四条畷市立歴史民俗資料館の見学を終えた後、東高野街道を南下、瓢箪山を左折して生駒越え・鳴川峠に向かう登山道に入る。山腹に東大阪市立郷土博物館があり、駐車場の前は山畑古墳群の22号墳である。この博物館は合併して東大阪となった布施、河内、枚岡各旧市域が一望できる場所に設けられたと説明にあるように、展望台からの眺望が素晴らしいのが特徴である。

この地域に人が暮らし始めたのは極めて古く、生駒山腹の草香山遺跡、千手寺山遺跡、正興寺山遺跡からは、2万年前の石器・石槍などの旧石器が出土し展示されている。次いで縄文時代の生活の痕跡は、鯨の骨・土偶などの出土、貝塚などが発見されており、弥生時代に入ると米の耕作に適したこの地では人口が急増加した。古墳時代に入るとさらに繁栄し、200基以上の古墳群が見つかり、馬の飼育の適地であったことを示す馬具や、武具・装身具など当時の有力な部族が在住していたことが示す品物が多数出土している。

生駒山の西側には、流れ下る川の形成した多くの谷筋がある。その谷の南側斜面の高地には6世紀から7世紀に掛けて小さな古墳が数多く築かれている。古墳が密集して築かれていることから、これらは群集墳と呼ばれ、東大阪だけではなく、さらに南に連なる八尾市・柏原市にかけての山腹にも多くの群集墳が分布している。これらの小古墳では、盛り土の内部に石を積み上げ、死者を安置する玄室と外につながる羨道と呼ばれる通路から成る横穴式石室が広くつながり、何度も繰り返し埋葬が行なえる構造となっていて、単独の尊貴な死者を葬るための巨大古墳とは大きく構造が異なっている。

東高野街道に戻り南へ市境を越えて数分走り、左折し中高安小学校を回り込むと、八尾市立歴史民俗資料館がある。八尾の平野部は縄文時代までは、ほとんど海底であり、高安山山麓だけが居住可能な地域であった。その後、古大和川の分流である多数の小河川が土砂を運搬堆積し、弥生時代になると堆積により形成された湿地の中の微高地に集落が営まれるようになった。この河内平野の低地部は稲作農耕文化を伝播した人々にとり適地で、初期の集落が多数存在した。古墳時代に入ると、平野部でも高安山麓でも古墳が盛んに作られており、4～5世紀の楽音寺・大竹山古墳群、6～7世紀の高安古墳群は、規模や数からみて、代表的な古墳群である。八尾歴史民俗資料館の展示の目玉に、大和川の付替え工事に関する資料があるが、これは江戸期（1704）の事で、古代史の範疇には入らない。

館を出て少し北へ戻った大竹地区に心合寺山（しおんじやま）古墳がある。全長約160mで、後円部の直径約92m、高さ約13m、前方部の幅が約90m、高さ12mの前方後円墳である。北に前方部南に後円部が等高線に沿って、3段に築成された大規模古墳である。古墳時代中期、5世紀の初め頃作られた古墳で、この地域には現存しない古墳も多いが、ここの墳丘は現在まで原形をほぼ留めており、国史跡に指定された。1993年から10次にわたって発掘調査が行われ、墳丘平坦部では円筒埴輪が建てられていた事が判明。また前方墳頂部に方形壇が確認され、その下に埋葬施設1基があった。後円墳頂部には粘土槨埋葬施設が3基あり、その西側の「西槨」から木棺と副葬品が発掘された。調査の後は史跡公園として整備され、出土した埴輪類・副葬品などは隣接の「八尾市立しおんじやま古墳学習館」で展示されている。特記すべき出



●写真1：博物館敷地内にある古墳

土品としては「水の祭祀場」を表した埴輪がある。ここは公園としてもなかなかユニークな憩いの場となっていると考えられる。

南には極近くに考古学的に著名な高安古墳群がある。ここは明治時代に多くの外国人研究者 E. S. モースや W. ガウランドなどが訪れ、いち早く海外に紹介された古墳群である。通称、「高安千塚」ともいい、300基以上の横穴式古墳が集まっている。群集墳を見て回るのは時間的に無理があるので、近鉄服部川駅の近くに車を止めて、遠望するだけに留めた。この古墳群は6世紀代の築造であり、当時八尾は物部守屋の本拠地であった事から、関心のある物部氏の興亡に関連して、遠望しつつ「高安千塚」は物部の墓地かという幻想に駆られたのである。

府道5号を西進、八尾高前で21号へ左折、JRを越えて太子堂交差点を右折するとすぐ大聖將軍寺がある。聖徳太子建立三太子の一つで、叡福寺の「上の太子」、野中寺の「中の太子」に対して、「下の太子」と呼ばれている高野山真言宗の仏教寺院である。587年物部守屋との戦いに際し、聖徳太子が護世四天王に戦勝祈願し勝利したことから、四天王寺とともに、当時の太子堂が建立され、その後、推古天皇により、寺が創建された。門前に秦河勝が守屋の首を洗ったという「守屋池」があり、近くには物部守屋の墓がある。

寺の前の国道25号線は旧奈良街道である。25号線を南下すると石川との合流点で道は大和川の堤防上に登り、東へと方向を変える。国豊橋北詰を直進、次の角を曲がると「史跡・高井田横穴公園」に突き当たる。凝灰岩の岩盤を洞窟のように掘った、200基以上と推定される大規模な横穴古墳群があり、6世紀中頃から7世紀前半かけて作られたものとされている。出土した土器、刀、劔、鏃などの武器、馬具、金、銀のイヤリングや玉などの装身具は隣接の橿原市立歴史資料館でみることが出来る。調査された横穴墓162基のうち27基で様々な線刻画が見つかっており、近畿では唯一、国史跡に指定された装飾古墳である。その第3支群5号墳の「ゴンドラ状の船に乗る正装した人物と傍らの見送るかのように手を振る女性」の絵は最も

◎写真2：心合寺山古墳全景



注目されている。この地は古代、飛鳥と難波を結ぶ主要交通路であった大和川の畔の丘陵で、川が平地に出る要地を望む地点にあり、水上輸送路の重要な拠点であったと思われる。船も様々に描かれているが、中には第2支群12号墳の線刻画のように帆船を思わせるような船もある。そして、この水上輸送路を抑えて、長きに亘り繁栄を誇っていたのが物部氏であることは歴史上に明らかであるが、歴史の知見と考古学上の発見を総合した学際的検討を経た考察が、地方のレベルでは未だ行われていないことは大変残念である。写真は吉本吉彦氏にご提供頂きました、感謝申し上げます。

(岡野 実)



●写真3：第2支群、12号墳の船の線刻画